

骨壺



400年続く有田焼の伝統技法からなる骨壺は優美さを醸し出す

400年の伝統文化の重み

永遠に納める器だからこそ
こだわってもいい

いままでただ用意されていたものを選んで来た。でも、大切な人が永遠に納められる器だから、こだわられるものならこだわりたい。伝統様式に基づいた優美にして華麗に彩どる有田焼。

有田製窯

福岡県の「博多」から佐世保線、特急みどりに乗る。途中、佐賀の田園風景が続き、しばらくすると温泉で有名な「武雄」に着いた。このあたりから車窓の風景がすっかり山間の景色に変わってくる。そして博多から1時間20分、「有田」に着。整備された駅周辺には陶器を販売する店が立ち並び、陶芸の里の趣を醸し出している。

17世紀のはじめに朝鮮半島から来た陶工によって日本で初めて磁器が焼かれた地として有名な有田。伊万里港から出荷されたことから伊万里焼とも言われ、江戸時代には遠くヨーロッパにも輸出され、王侯貴族を魅了したという。繊細で優美な有田焼のその伝統技術は、現代まで受け継がれている。

迎える車に10分ほどゆられて目的地、有田焼の工房、「有田製窯」に着いた。2階建ての建物の中に入ると、それぞれの製造工程を受け持つ職人さんたちが作業をしている。

「採石といって陶石を掘り出して選り分けるところから始めて、ろくろ形成、乾燥、素焼、下絵、そして本焼きから窯出しまで15工程あります。白磁、青磁、瑠璃などはここで完成ですが、さらに上絵付けをして低温度で焼成する赤絵などもあります」と、陶芸家の西城鉄男さん。

白く透き通るような地に繊細で優美な彩取りを見せる絵付けが有名な有田焼は、現在、一般家庭の食器からインテリアなど様々な製品を製造している。さらに現代のライフスタイルにあったモダンな製品まで創作の幅は広がる。そして目をひくのが、色鮮やかな絵付けや、透き通るような白磁、青磁など色とりどりの骨壺である。骨壺は決められたもの、と思いきや、思い通りに、この有田焼の骨壺には衝撃を受けた。例えば、遺骨を永代に渡って守ってくれる骨壺。こんなこだわり方もあるのだ。



それぞれの制作工程にベテランの職人技が光る